売薬の意匠あれこれ 〈その34〉小型看板―その4

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長　平井 有（ひらい・たもつ）

「売薬の意匠あれこれ」では3回続けて売薬をはじめとするさまざまな看板を紹介しました。〈その31〉では店内に掲示した縦型の小型看板を、また〈その32〉では医薬分業が時代の潮流となる以前の時代の、薬局が調剤所であることをアピールした看板を、〈その33〉では「造形看板」を紹介しました。

今回も前号に引き続き意匠性に富んだ「造形看板」を紹介します。前回も触れましたが「造形看板」は江戸時代からあった看板の一種で、商品を文字ではなく商品のイメージなどを造形であらわした看板で、江戸時代ですとろうそくの形のろくそく屋、げたの形のげた屋、筆の形の筆屋の看板などがありました。

また“我が身を捨てて弱気き者を助ける”という江戸っ子の心意気を店名とした「かまわぬ」という店名を、「鎌の絵＋○（輪）の絵＋ぬ（の文字）」であらわした「判じ物」と呼ばれる謎解きのような看板もありました。

①

②

①「ウルユス」の看板

江戸時代は鎖国が行われ、長崎の出島での阿蘭陀（オランダ）と中国大陸の清国以外の国々とは貿易が行われませんでした（例外的に対馬藩は朝鮮、薩摩藩は琉球王国、松前藩は蝦夷地のアイヌ民族を通じて樺太などと交易を行っていました）。

しかしながら西洋に対するあこがれは強いものがあり、幕府は天保11年（1840）と嘉永6年（1853）に看板に横文字を用いることを禁止しましたが、なかなか守られませんでした。

この「ウルユス（ULUUS）」の看板は明治期のものですが、あたかも阿蘭陀語のような高貴な商品名「ウルユス」という名は、本剤が体内の毒を一掃する作用（おなかの毒を空（から）にする）ことから「空」の文字を分解して、いかにも洋名のような言葉をつくり上げた造語です。その他いかにも「ホルトス」という洋名のような名前の薬もあり、日本人が横文字や西洋文化に弱いのは今も昔も変わらないようです。

なお馬をデザインしているのは、当時地上を走る最も速い乗り物は馬で、効き目の速さを疾走する俊足の馬であらわしたものです。

②「胃活」の看板

OTC薬で目薬の分野では「参天製薬」と双璧をなす「ロート製薬」は、明治32年（1899）に奈良県出身の創業者の山田安民翁自らが開発した胃腸薬「胃活」を販売するために、大阪で「信天堂 山田安民藥房」を開業したのがはじまりです。

この「胃活」は“胃病に胃活、泣く子に乳”のキャッチフレーズで大いに売り上げを伸ばしました。そして後日この「胃活」を改良した「シロン胃腸薬」が現在でも販売されている「パンシロン胃腸薬」へと発展し、同社を現在の胃腸薬部門、「ロート目薬」の目薬部門、そして「メンソレータム」を主力とする外用薬部門の三大部門からなる一大OTC薬メーカーへと押し上げることになります。

なお、シルクハットをかぶった紳士の胸に書かれた“The Ikwatsu”の横文字は紳士の服装とあいまって西洋の雰囲気を高めており、①の「ウルユス」と同じように"西洋の先進国文明のイメージ"を感じさせるデザインとなっています。

③「奇應丸」

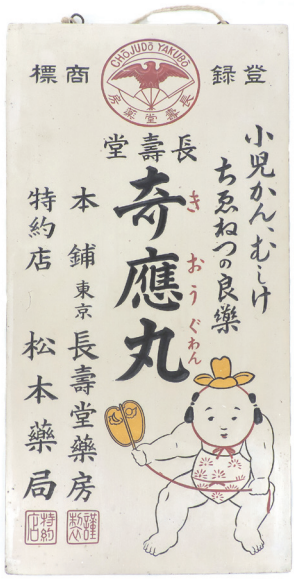
小児救急薬というと関東では「宇津救命丸」ですが、関西では「樋屋奇應丸」の方がよく普及しているようです（関ヶ原が境目らしい）。

「宇津救命丸」は旅の僧侶がもたらした薬と伝えられ、この「奇應丸」は唐の鑑真が伝えたともいわれている伝統薬です。これらの薬はもともと五臓の働きが弱って、バランスが崩れて起きる動悸、息切れ、めまい、立ちくらみ、手足の冷えなどのさまざまな症状に効く五疳薬として大人にも用いられていたものです。「救心」はその流れをくむ五疳薬の一種ですが、明治時代になってこれらを小児専門薬として売り出したもので、この博多人形のような幼児をデザインした看板も、その効果を強く押し出したものとなっています。

④「熊膽木香丸」の看板

この赤鬼が持った金棒に名前の書かれた「熊膽木香丸（ゆうたんもっこうがん）」の歴史は古く、文政3年（1820）、同7年（1824）出版の『商人買物獨案内』（播磨屋五兵衛）にも紹介されており、大坂・心斎橋で（ひぜんぐすり＝疥癬などの皮膚疾患治療薬）を販売していた油屋伊兵衛が製造していた「はらいた（腹痛）」の薬の看板です。

その成分の詳細は不明ですが、商品名から推察して熊膽（別名くまのい、熊の胆嚢、つまり胆汁成分。ウルソデオキシコール酸など含有）と木香（芳香性健胃作用があり、現在でもその根を加味帰脾湯や女神散などに用いる）を二大成分とする胃腸薬と推察されます。そしてなによりも“鬼に金棒”の諺のように、「熊膽木香丸」があれば胃病は怖くない、胃病は退治できるとのイメージを与えるインパクトの強い看板です。



③

④